

日本の里山生活が子どもたちに与えた真の 日本文化と日本語学習意欲 ～日本語・日本文化体験学習プログラム「サマー キャンプ in ぎふ2007」を終えて

米日教育交流協議会
代表 丹羽筆人

子どもたちの口から自然に日本語が出る環境がそこにある

7月4日夕方、集合場所のJR東海道線穂積駅(岐阜県瑞穂市)に現れた第1期の参加者は、全米各地や香港からやってきた小中学生12名です。見送りの保護者との別れは寂しそうでしたが、これから始まる2週間のサマーキャンプへの期待と新しい仲間に出会えた喜びが不安をかき消していたようです。キャンプ開催地の岐阜県揖斐川町までは車で約1時間。トンネルを二つ越します。つまり、かつては二つの峠越えをしなければならなかった地です。

そして、到着したのはこのキャンプでの宿泊場所の一つ「ラーニングアーバー横蔵」です。この施設はかつて小学校だった建物を利用しています。過疎化が進み廃校となってしまったのです。外観や廊下、各部屋の扉などは学校そのものですが、元職員室の食堂、元教室の客室、元理科室の浴室は旅館のようです。各部屋に荷物を置くや否や子供たちが駆け込んだのは体育館です。早速バスケットボールや卓球に汗を流し、初対面であることを感じさせないほど打ち解けていました。

しかし、主催者である私にはある不安がありました。仲良くなったのはいいのですが、参加者同士の会話はすべて英語、そして、私にも英語で話しかけてくるのです。また、宿泊施設の方に声をかけられても日本語が出てこないようです。

翌日は開会式。日本での受け入れコーディネーターの「NPO法人・校舎のない学校」の方々、宿泊施設「ラーニング・アーバー横蔵」の代表者、ホストファミリーの皆さんが集まり、歓迎の言葉やお互いの自己紹介を行ないました。開会式終了後はホストファミリーに伴われて各家庭に向



かい、3泊4日を過ごしました。優しいホストファミリーのお父さんやお母さん、おじいさんやおばあさんに囲まれ、子どもたちとは兄弟のようにはしゃいで、日本の家庭の雰囲気を楽しみました。ホームステイ後はそれまで日本語をあまり話さなかった子どもたちの口からも少しずつ日本語が出ていました。

勉強は難しかったが、楽しかった学校体験

楽しかったホームステイが終わるといよいよ学校体験の始まりです。地元の小学校・中学校は、1学年1～2クラスの小さな学校です。全校の児童・生徒が海外の子供たちが来ることを待ち望んでいたようです。歓迎の嵐に遇った子どもたちは恥ずかしそうにしていたましたが、内心はとても嬉しかったようです。この学校体験では、海外の子どものために特別にアレンジした内容ではなく、日本の子どもが日常的に受けている授業はもちろん、給食や掃除、部活動などにも参加します。日本語に自信のない子どもには授業は少し難しかったようですが、学校から帰ると自ら進んで宿題に取り組んでいる姿を見て本当に感心しました。また、小学6年生はこの地域の伝統芸能「谷汲踊り」の練習に参加でき、実際に太鼓やしなと呼ばれる大きな飾りを身につけて踊りを体験しました。



学校生活での参加者の一番の楽しみは休み時間です。なぜならば、同年代の関心がある話題での情報交換ができるからです。あっという間に過ぎた1週間でしたが、海外の子どもにとっても日本の子どもにとっても、異文化に暮らす同年代の子どものライフスタイルや考え方をすることは貴重な経験になったようです。このように小中学生同士の自然な交流を通じてお互いの文化を吸収し合うことが真の国際交流だと改めて感じました。
子どもたちにとって驚きの古民家「かやぶきの家」

学校体験終了後に行なわれたプログラムは古民家生活体験です。滋賀県と福井県の県境に近い旧坂内村にある150年前に建てられた住宅を拠点として、周囲の自然や地域住民と密着した様々な活動を行ないました。これは住人が亡くなり廃墟と

なるところをサマーキャンプの共催団体でもあるNPO法人「校舎のない学校」が修築し、研修の場として利用している「かやぶき屋根」の住宅です。宿泊施設「ラーニング・アーバー横蔵」から、車で曲がりくねった国道を約40分上っていく途中に見える川は、台風による大雨の影響で、濁流がものすごい勢いでうねり、いつものさわやかさはありません。山からは大量の水が流れ落ちており、ところどころに折れた木や石が転がっています。このような自然の変化に不安を感じている私とは裏腹に、子どもたちはまだ見ぬ古民家への期待に胸を膨らませていたようです。

古民家「かやぶきの家」に到着しました。

「こんなに小さい家なの？」

「なんで虫がいっぱいいるの？」

「テレビがないの？つまんな〜い。」

などの声があちこちから聞こえます。想像とは異なる世界がそこにあったようです。さらに、皆で手分けして掃除をするようにという指示にはブーイングの嵐です。

「では、掃除しないでここでご飯食べたり寝たりできますか。足の裏やテーブルの上を見てください。」

そして、子どもたちは真っ黒になった足の裏、ほこりの積もったテーブルなどを見ると掃除に取り掛かりました。しばらくすると、床の雑巾がけ、ほうきでの掃き掃除、お風呂掃除やトイレ掃除など、家ではやってない作業を楽しむ子どもたちの姿が見えました。



「かやぶきの家」は、8畳間が4つ「田の字」のように並び、一部屋には囲炉裏があります。室内のふすまはもちろん、外側の扉もすべて引き戸です。サッシではありませんので風通しが良いですが、虫も出入り自由です。鴨居の高さも低く、背の高い中学生は頭をぶつけそうです。台所は土間にあり、水道やガスが引かれていますが、昔ながらのかまどもあります。お風呂は五右衛門風呂の名残を残す小さなものです。かつて薪を燃やした場所に湯沸かし器が取り付けられています。トイレは家の外にありますが、ここだけは最新の洋式水洗トイレです。こうして、かつて見たこともないような「かやぶきの家」に大驚きの子どもたちの古民家体験が始まりました。

環境が子どもたちを変え、現代っ子が自然児に

「かやぶきの家」は山に隣接し、水田に囲まれています。家の前にはこの地区の他の家と同様に小川が流れています。そして、この小川は子どもたちにとってはとっても楽しい遊び場になりました。最初は足をぬらしたり、手を突っ込んだりして遊ぶだけだった子どもたちは、ものを流す楽しさを見つけ、木の枝や木切れを流し、それを追いかけるという遊びを生み出しました。さらに、思い思いに小枝や葉っぱを利用して舟(のようなもの?)を作って競争させて楽しむようになり、舟を追いかける子どもたちの歓声が、静かな里山に響き渡っていました。

また、「だるまさんがころんだ」や「かごめかごめ」などの、伝統的な遊びを知っている子どもがおり、自然にそれら



の遊びに興じる子どもたちの姿も見られました。日本では小学校高学年にもなるとこのような遊びをする子どもも少ないですが、中学生も含め、純真な笑顔を見せて遊ぶ姿をとってもほほえましく思いました。日頃はテレビを見ながらゲームやパソコンで遊ぶ子どもたちからは想像のできない姿です。また、遊びを生み出す独創性、年齢差を超えて楽しめる協調性に感心させられました。「現代っ子」だって環境が変われば昔のように遊べるのだということを実感したのです。

いたずらで知った自然を利用する暮らし

ところで、小川での遊びは楽しいだけではすみませんでした。ある時、近所の農家の方が子どもを叱っている声が聞こえたのです。あわてて駆け寄って事情を聞いてみると、田んぼに水を引くために小川の水を堰き止めていた板を抜いてしまったようです。小川の流れが緩やかになり舟が流れにくくなったから抜いたとのこと。実は、この小川は農業用水として使われているのです。それだけでなく、野菜やお米、食器、農具を洗ったり、飲み物や食べ物を冷やしたり、というように生活にも利用されています。かつては料理や飲み水として、また洗濯にも利用されていたのです。上流の家では下流の家が利用することを考え、炊事の時間には洗い物をしないように心がけていました。このように自然を利用して人々の暮らしが成

り立っていることを、子供たちが身を持って実感したできごとでした。

古民家生活体験では、地元で暮らす方が講師となって指導してくれる工芸体験、食事を子どもたちが作る自炊体験も行なわれました。今回の講師は元村長さん。方言混じりの日本語での指示に従い、真剣にガラス細工や木工に取り組んでいました。



自炊体験は初めて料理を作るという子どもも多く、とても貴重な体験となったようです。食器の後片付けをする習慣はこのキャンプを通じて徹底しましたが、料理を作ったり、後片付けや食器洗いも自分たちで行なったことは、子どもたちにとっては大変でしたが、とても楽しかったようです。そして、皆が毎日この仕事をしてくれるお母さんの大切さを感じるこ

とができました。また、流しそうめんや七輪を使った炭火焼など味わったことのないような貴重な体験もできとても良い思い出となったようです。



スポーツで汗を流すことが言語の壁を乗り越えさせた

第1期、第2期ともに参加者に好評だったが、地元の小中学生とのスポーツ交流です。昨年のサマーキャンプでも交流したバレーボールチーム「ウインディーズ」とは、各期2回ずつ練習に参加させてもらいました。このチームは、日頃よりバレーボールの練習を通じてスポーツの楽しさや年齢差を越えた子どもたちの交流を重視しており、海外から来た参加者がその輪に溶け込むのは簡単なことでした。

練習が始まるや否や、まるで以前からメンバーであったかのようにチームに馴染む子どもたち。バレーボールは知っているものの、それらの練習は初めてで勝手が分からないと思いきや、日本の子どもたちの日本語での説明をすぐに理解し、的確に実践していました。そして、印象的だったのは、子どもたちの満面の笑顔と自然に発せられていた日本語です。サマーキャンプ参加の子どもたち同士では英語での会話が多いのにもかかわらず、この練習においては、「そっちだよ。」「いくよ。」などの言葉が飛び交います。そして、強烈なレシーブを受けた時に発した「いて〜。」という大声には、練習を見ていた監督や保護者も大笑いでした。スポーツで一緒に汗を流すことは、言語の壁を容易に越えさせるのだと実感しました。

ず、この練習においては、「そっちだよ。」「いくよ。」などの言葉が飛び交います。そして、強烈なレシーブを受けた時に発した「いて〜。」という大



声には、練習を見ていた監督や保護者も大笑いでした。スポーツで一緒に汗を流すことは、言語の壁を容易に越えさせるのだと実感しました。

日本人の慣習も教えてくれたスポーツ体験

もう一つ、子供たちがこのスポーツ交流で学んだことは、年齢を超えた子供同士での役割分担と、目上の人に対する礼儀作法です。練習を通じて年上の子どもが年下の子どもに多くのことを教え、年下の子どもは年上の子どもに従うという関係の中で、子供たちは現代っ子に薄れがちとなった縦社会での協調性を自ら学ぶことができました。また、年上の子どもが大人に対して実行している言動を見て、年長者に対する礼儀作法も学ぶことができました。それらは、ファーストネームで呼び合うことが仲の良いことの証という欧米社会の文化の中に育つ子どもたちに最も欠けている部分です。そして、将来、社会人として日本人社会の中で生きていくためには大変重要なことです。日英両語のできるバイリンガルであったとしても、日本人社会の礼儀作法やマナーを知らなければ、特に日本の企業は受け入れてはくれません。日本語の学習のみでなく、日本の慣習も体感することができるのも「サマーキャンプ in ぎふ」ならではのことなのです。

日本の子どもとの合宿で知った生きた日本の文化

「サマーキャンプ in ぎふ2007」は第1期と第2期の2期間、各2週間で行なわれました。第2期は7月25日から始まり、ホームステイ、古民家体験、スポーツクラブの小中学生との合宿、日本の幼児から小学3年生までの子どもたちとの合同プログラムを行いました。参加者は小学生3名、中学生1名、高校生1名と少数でしたが、日本の子どもたちと寝食をともにして活動をする事によって、生きた日本語と日本の文化を体感することができました。

陸上競技チーム「精華スポーツクラブ」との合宿では、小中学生約50人の中にアメリカの子どもたちも混じって活動しました。山歩きや長距離のウォーキング、大縄跳びなどの練習に参加した

ほか、自由時間には日本の遊びで、夜は花火をしたり、トランプをしたり、お話をしたりと盛り上がっていました。同年代の子どもは言語の壁はもちろん、文化の壁も簡単に打ち破れるのだと実感しました。

日本の子どもたちとの合同プログラムは3泊4日で行なわれ、日本の子どもも少人数であったため、深く接する良い機会に恵まれました。民話や伝統的な遊びを通じて日本語・日本文化を体験する時間、歌や童話を通じて英語・アメリカ文化を学習する時間、伝統工芸制作を体験する時間、花火をしたり、BBQをしたり、スポーツに汗を流したりして交流する時間など、それぞれ楽しい時を過ごしました。そしてお風呂に入って眠るまで布団に寝転びながらのトランプ遊びは盛り上がったようです。（この時間はさすがに私も付き合っていないので詳しく知りません。）



英語・アメリカ文化の時間は、アメリカの子どもたちが活躍してくれました。アメリカの小学生の間ではやっている歌を紹介してくれたり、「3びきのこぶた」を即興で演じてくれたりして、本場の英語を聞いた日本の子どもたちは大満足でした。特に自由時間や食事時間にアメリカの子どもたちの間に本場の英語が飛び交っていましたので、耳も慣れていて聴き取り易かったようです。

日本語・日本文化の時間は、早朝6時半のラジオ体操から始まりました。近所のお寺には地元の子どもたちも大勢集まっていました。体操の後はお坊さんによるお話と読経を体験、日本の田舎の夏休みを体験しました。お経はよく分からなかったけれど、独特の雰囲気を感じ、さらに経本と数珠をプレゼントされて、みなとても嬉しそうでした。



朝食後はお坊さんの奥様が先生です。紙芝居、地元民話を披露してくれ、新聞紙や広告を使ったかぶとや紙鉄砲の作り方、折り紙での鶴やコマ作り方も教えてもらいました。アメリカの子どもの中には折り方をよく知っている子もいました。現地校で日本の文化を紹介するために練習したと

か、補習校で習ったとかいうことでした。一方、日本の子どもの中に折り方をよく知らない子もいましたが、みんな一様に折り紙に熱中していました。しゃべりっぱなしで静かにならなかった子どもたちが、黙々と折り紙に取り組んでいる姿はまるで別人のようでした。また、この他、お手玉、おはじきや外での遊びも用意していましたが、あっという間に時間が過ぎて、おはじきで遊んだところで残念ながら時間終了となってしまったのです。

そして、3泊4日のプログラムもあっという間に終了し、同時に「サマーキャンプ in ぎふ2007」も幕を閉じました。解散場所のJR穂積駅で保護者に出迎えられ笑顔で手を振る子どもたちを見て、怪我や病気もなく無事終了したことに安堵するとともに、子どもたちと別れることへの一抹の寂しさがつのってきます。もう会うこともないかもしれませんが、キャンプの思い出を一生忘れず、キャンプでの体験を糧に大きく成長した子どもたちの姿を想像し、寂しさを紛らわしている私でした。



執筆者プロフィール

岐阜県生まれ。「学校法人河合塾」で大学進学に関する進路・学習指導、進学情報誌の編集、高校での進学講演などを担当。また、イギリスやアメリカの大学進学者のサポート、海外でのサマーキャンプの実施にも携わった。1999年来米し、カリフォルニア州、ニューヨーク州、ニュージャージー州、ミシガン州において補習校や学習塾で講師を歴任。また、日米の教育事情などに関する原稿を執筆し、日米で発行する新聞や情報誌などに掲載されている。2006年1月、「米日教育交流協議会(UJEEC)」を設立し、日本で日本語・日本文化体験学習プログラム「サマーキャンプ in ぎふ」を企画・運営している。2007年9月からは「河合塾海外帰国生コース北米事務所」の担当者として海外帰国生入試に関するアドバイスをを行うなど、在外子女に対する教育活動にも力を注いでいる。

☆米日教育交流協議会の活動内容については

ウェブサイトwww.ujeeec.org を参照

☆問い合わせ先

1-248-346-3818 またはinfo@ujeeec.org